

安国論御勘由来

正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戊亥の時、前代に超えたる大地振(震)、同二年戊午八月一日大風、同三年己未大飢饉、正元元年己未大疫病、同二年庚申四季に互つて大疫已まず。万民既に大半に超えて死を招き了んぬ。

而る間、国主之に驚き内外典に仰せ付けて種種の御祈祷あり。爾りと雖も一分の験も無く還つて飢疫等を増長す。

日蓮世間の体を見て粗一切経を勘うるに、御祈請験無く還つて凶悪を増長するの由、道理文証之を得了んぬ。終に止むこと無く勘文一通を造り作して其の名を立正安国論と号す。文応元年庚申七月十六日辰時屋戸野(宿屋)入道に付して古(故)最明寺入道殿に奏進了んぬ。此れ偏に国土の恩を報ぜんが為なり。

其の勘文の意は日本国天神七代、地神五代、百王百代、人王第卅代欽明天皇の御宇に、始めて百済国より仏法此の国に渡る。桓武天皇の御宇に至りて其の間五十余代二百六十余年なり。其の間一切経並に六宗之ありと雖も、天台・真言の二宗未だ之あらず。

桓武の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に最澄という小僧あり後に伝教大師と号す。已前に渡る所の六宗並に禅宗之を極むと雖も、未だ我が意に叶わず。聖武天皇の御宇に大唐の鑒真和尚渡す所の天台の章疏、四十余年を経りて已後始めて最澄之を披見し、粗仏法の玄旨を覺り了んぬ。

最澄、天長地久の為に延暦四年叡山を建立す。桓武皇帝之を崇め天子本命の道場と号す。六宗の御帰依を捨て、一向天台円宗に帰伏したもう。同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ。同延暦廿一年正月十九日高雄寺に於て南都七大寺の六宗の碩学、勤操・長耀等の十四人を召合せ勝負を決談す。六宗の明匠一問答にも及ばず口を閉づる事鼻の如し。華嚴宗の五教、法相宗の三時、三論宗の二藏、三時の所立を破了んぬ。但自宗を破らるゝのみに非

ず、皆謗法の者たることを知る。

同じき二十九日皇帝勅宣を下して之を詰る。十四人謝表を作りて皇帝に捧げ奉る。其の後代代の皇帝叡山の御帰依、孝子の父母に仕えるに超え黎民の王威を恐るゝに勝れり。或御時は宣明を捧げ、或御時は非を以て理に処す等云云。殊に清和天皇は叡山の慧亮和尚の法威に依つて位に即き、皇帝の外祖父九条右丞相誓状を叡山に捧げ、源右將軍は清和の末葉なり。鎌倉の御成敗是非を論ぜず叡山に背違す、天命恐れ有るものか。

然るに御鳥羽院の御宇、建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の者あり。悪鬼其の身に入つて国中の上下を誑惑し、代を挙げて念仏者と成り人毎に禅宗に趣く。存の外に山門の御帰依浅薄なり。国中の法華・真言の学者棄置せられ了ぬ。故に叡山守護の天照太神・正八幡宮・山王七社・国中守護の諸大善神、法味を食わずして威光を失ひ国土を捨て去り了ぬ。悪鬼便を得て災難を致し、結局他国より此の国を破るべき先相勘うる所なり。

又其の後文永元年甲子七月五日彗星東方に出で、余光大体一国に及ぶ。此れ又世始まりてより已来無き所の凶瑞なり。内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず。予、弥、悲歎を増長す。而るに勘文を捧げて已後九箇年を経て今年後の正月大蒙古国の国書を見るに、日蓮が勘文に相叶うこと宛も符契の如し。

仏記して云く「我が滅度の後一百余年を経て阿育大王出世し、我が舍利を弘めん」と。

周の第四昭王の御宇、大史蘇由が記に云く「一千年の外、声教此の土に被らしめん」と。

聖徳太子の記に云く「我が滅度の後二百余年を経て山城の国に平安城を立つべし」と。
天台大師の記に云く「我が滅後二百余年の已後、東国に生れて我が正法を弘めん」等云云。皆果して記文の如し。

日蓮正嘉の大地振(震)、同じく大風、同じく飢饉、正元元年の大疫等を見て記して云く、他国より此の国を破るべき先相なりと。自讚に似たりと雖も、若し此

の国土を毀壞せば復仏法の破滅疑う無きものなり。而るに当世の高僧等誹謗の者と同意の者なり。復自宗の玄底を知らざる者なり。定めて勅宣御教書を給いて此の凶悪を祈請するか。仏神弥 曠恚を作し、国土は破壊せん事疑い無きものなり。

日蓮復之を対治するの方之を知る。叡山を除いて日本国には但だ一人なり。譬えば日月の二つ無きが如し、聖人肩を並べざるが故なり。若し此の事妄語ならば、日蓮が持つ所の法華經守護の十羅刹の治罰之を蒙らん。但だ偏に國の為、法の為、人の為にして身の為に之を申さず。復禪門に対面を遂ぐ故に之を告ぐ。之を用いざれば定めて後悔有るべし。恐 恐 謹言。

文永五年太歳 戊辰 四月五日

法鑒御房

日蓮花押

文永五年四月。四十七歳。於鎌倉。(頼綱父)法鑒房盛時宛。

真蹟在中山法華經寺。原漢文。

1257 康元2年・正嘉1年（改元3・14）丁巳 聖寿36歳

8・23 鎌倉大地震被害甚大(定421定442・吾鏡・建記・如記)

1258 正嘉2年/戊午 聖寿37歳

1・聖人、駿河岩本実相寺に入蔵す

8・1 京畿大風雨、稼穀損亡し安嘉門倒壊する(定421)

10・16 鎌倉大雨洪水、民屋流失し溺死者多数にのぼる

1259 正嘉3年・正元1年（改元3・26）己未 聖寿38歳

・聖人、再び駿河岩本実相寺に入蔵す(別統)

・守護國家論(定89)を著す

・念佛者追放宣状事(定2258)を著す

4・飢饉疫病流行(師守記・鍊抄・歴編)

11・諸国飢饉疫病が流行する(定421)

1260(39) 正元2年・文応1年（改元4・13）庚申 聖寿39歳

2・災難興起由來(定158)を著す

2・災難封治鈔(定163)を著す

4・29 鎌倉大火

6・1 鎌倉大風洪水

7・16 宿谷入道を介して立正安國論を前執権時頼に献ず

(定209・定421・定442・註讚・別統・因譜)

7・比企大学三郎入信す(別統・年譜)

8・5 諸国大風

8・27 夜、謗法徒鎌倉松葉谷草庵を襲いこれを焼く(定1286・定1330)

1261 文応2年・弘長1年（改元2・20）辛酉 聖寿40歳

5・12 執権長時、聖人を伊豆に配流、川奈に着す

(定229・定1673・別統・蓮譜・蓮伝)

6・17 聖人、伊東の地頭八郎左衛門より立像釈尊を感得す(定230・興集)

1262(41) 弘長2年/壬戌 聖寿41歳

1・16 四恩鈔(定233)を著す

2・10 教機時國鈔(定241)を著す

1263 弘長3年 / 癸亥 聖寿 4 2 歳

2・22 聖人、伊東より鎌倉に帰る

(定989・定1237・定1330・註讚'別統・蓮譜・蓮伝

11・22 北條時頼(37)、最明寺に卒す(北九・吾鏡・代記・王覽・然凶・釈書)

1264 弘長4年・文永1(改元2・28) 甲子 聖寿 4 3 歳

7・5 大彗星出現(定423・定443・定954)

1268 文永5年 / 戊辰 聖寿 4 7 歳

1・18 蒙古使黒的・高麗使潘阜大宰府に到着し国書・方物を献上し通交を要求す
(定427・定443・代記・元史・皇記・東通・師守)

2・7 幕府蒙古・高麗の国書を奏上する。北條時宗、蒙古使を退く
(深記・蒙牒奥・帝語)

・19 朝議は蒙古復牒を不可とする幕府黒的らを帰す

・27 幕府蒙古襲来の防備を讃岐国の御家人らに下知する

4・5 法鑒房へ書(安国論御勘由来)を送る(定421)

10・11 北條時宗・極楽寺良観等の11ヶ所へ書を送り蒙古の事を論ず
(定427・定959・註讚)

6・14 朝廷一二条の意見を評定する

7・17 朝廷異国降伏を祈願する

1269 文永6年 / 己巳 聖寿 4 8 歳

12・8 安国論を写す(定442) 奥書